



山村まよつこ
山麓朴談

3年程前、諏訪出身の作家新田次郎氏の二男で世界的な数学者の藤原正彦氏が、「国家の品格」という大変な話題作を出版された。「品格」。しばらく忘れていた言葉でありました。

私たちは目まぐるしく変る社会や経済の進展に遅れをとらないことに汲々として、自分たちの行動や社会のあり方の格調高さや、折り目正しさ、規範、誇りというようなことには無関心であったのではないのでしょうか。そうです。社会が正しく末広がり発展して行くためには、常に自分の行動を省りみて、自己本位に陥っていないか、人に誇れる品格は保たれているのか、点検していることが必要なのです。

藤原氏は言います。長い海外生活にあって、日本の国家としての品格が何よりの誇りであり、外国人から尊敬の念で見られ、世界文化をリード出来るのだと。日本の文化が自己抑制的で勤勉、儉約、正直などの規範は海外注視のものであり、もったいない感覚は近年特に認められてきています。日本の思想は国語力によって養われるものであり、日本人はもっと国語を大切に、国語力を養わなければならないと。

国語力の重要な要素の一つは漢字力であり、藤原氏も漢字の重要さを説いています。漢字といえば気になるのがひらがなの混ぜ書きです。例えばほ場、よう怪、清そなど、圃場、妖怪、清楚と書くべきです。例を上げれば切ないところですが、これは当用漢字表にのっていないという理由です。私達を私たちするのは柔らかさを出す上で良いのかも知れませんが、子供を子どもとするなどは、子供は大人のお供ではないとか、供養の供の字であり死を連想させるとか、変な理由もあります。また本来の字が当用漢字表にないという理由で萎縮、叡智、障碍と書くべきものを委縮、英知、障害などと書きかえます。こうして日本人の語彙は破壊され貧困となり、国語力は弱くなります。

国家の品格がなければ国を愛することは出来ません。地域社会やコミュニティも同じで、その品格がなければ愛することは出来ません。私たちは自信と誇りをもって国や地域を愛し、誇りに満ちた社会を実現しなくてはなりません。

原村長 清水 澄

祝敬老会
友人との交流も楽しみに!!

9月7日に行われた敬老会には招待者1525名のうち約300名が訪れ、祝品の贈呈や腹話術の披露などで、長寿のお祝いがされました。後半の民謡を嬉しそうに聴いていた女性は、現在90歳で、なんと3年前まで民謡を歌っていたらしく、「よくこんな高い声出るねえ」と、感心しながら口ずさんでいました。仕事を休みにしてきた別の女性は、久しぶりに会う友人との語らいを楽しみながら帰っていきました。

88歳に達した方の代表で宮坂尚三さんに祝品が贈呈されました。招待者のうち100歳以上の高齢者の方は5名(男性1名、女性4名)でした。



八ヶ岳中央農業実践大学校 70周年祝う



昭和13年4月3日「八ヶ岳修練農場」として創設された八ヶ岳中央農業実践大学校は、今年70周年を迎えました。記念式典や記念史・誌の発刊などさまざまな記念行事が、同窓会の島田昭郎氏が会長を務める実践大学校創立七十周年記念会の主催で行われました。

10月18日の記念式典では、原村、茅野市などへ農村更生協会会長から感謝状が授与されました。これに対し村長は「ここに学校があるということは原村にとって大変な誇りです。農業立村の村であるが多くの農業者の心の支えとなっている。そういう意味で大変な意義がある」と謝辞を述べました。

式典の前日には、校内に建立された、いづれも故人である石黒忠篤氏、小平権一氏、久保佐土美氏の顕徳碑の除幕式が行われました。農林省(現農水省)の大臣や事務次官、農場長などを務められた皆さんで、大学校の創設や更生運動に大変、力を尽くされました。

当時、約300haの農場を整備するまでには、80名もの原野の地権者等との半年にも及び交渉があったようです。大

→開墾当時の風景/写真提供
八ヶ岳中央農業実践大学校



学校の建設は「農村経済の更生と新しい村づくりのためには、これを担う人材を育成しなければならない」という強い信念によるものであったということが、当時の記録からもうかがえます。

大学校の卒業生は既に3000人を超え、農林体験学習では今年、史上最高の19000人近い児童生徒を受け入れたそうです。

→顕徳碑除幕式



中村清一郎さんの菊、受賞
“農林水産大臣賞”受賞



JA全農長野と全農長野花き専門委員会が主催した2008信州フラワーショーで中新田の中村清一郎さんの育てた菊が農林水産大臣賞を受賞しました。昨年も南信フラワーフェアで最高賞の農政局長賞を受賞されたそうで「品評会の度に上位の花のつくりが違うし、切り花の品評会では咲いた花を真すぐに束ねないといけなくて、それには技術が必要かも」と品評会への感想を語っていただきました。現在、70代の父母と行っている菊の栽培や、品評会に対しては「出荷とは違う部分はありますが、基本はシンプル。やっぱりいい菊を作りたいという気持ちが常にあります。畑全体にいい花ができると仕事もとても楽なんですよ」というのが本音のようです。

楽しいかという問いに対しては「苦しい・・・そこで客観的に見た時、のたうち回っている自分がいるのが楽しいんじゃないですか。金銭的なものじゃなくて品質的なものって必ず返ってくるので、そこは楽しいと言えますね」と、笑いながら中村さんは話してくださいました。



中村さんの出品した作品の菊の種類は「岩の白扇」